

Title	國學院雑誌(二十八卷)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.131(291)- 132(292)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大正十一年度雑誌主要論文 書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

更に版圖の性質より、(一)領土の限界としての國境(二)領海の限界としての國境及び(三)領空の限界としての國境の三種に區分してゐる。次に

「田園都市に就きて」(石井逸太郎、九ノ一)は都市の膨脹より都市生活と田舎生活との比較に及び、田園都市の起原、其の交通線との關係、道路系統、衛生の各般に涉り、轉じて金融都市を論じ日本の田園都市を評してゐる。最後に

「米領ヴァージン諸島に就て」(同人、十ノ三)は自然的觀察と人文的觀察との二觀察を施した。位置面積、西印度諸島の地體構造ヴァージン諸島の地質及地形の三項は前者に屬し、歴史的瞥見、米丁間の賣買交渉顛末、地理的位置の三項は後者に屬する。(飯田忠純)

國學院雜誌 (二十八卷)

比較神話學上より見たる日本神話

(一、三及び二、一五、及び三、一八二)

松村 武雄

日本の神話に現れた神々は生氣的精靈、神人同格的天然神、人文的人格神、抽象的神格の四種あり、その中でも神人同格的天然神、人文的人格神が主として活躍してゐる。宇宙創成觀は剖判說(重いものは沈んで地となり、軽いものは浮いて天となるといふ說)と啓發說(葦牙の萌騰るが如く發生したといふ說)の二種あり、前

者は支那より來り、後者は固有のものであつたらしい。啓發說では生成の原動力を必要とするが日本では高御產巢日、神產巢日の二神が之に當るらしい。次いで諸册二神が國土を生むと云ふ神話は國土、皇室を愛する日本人の國民性を現してゐる。伊邪那岐命は天空神であり、伊邪那美命は大地女神であらう。又農業神話は素戔鳴尊と日讀命の二人に關係づけられてゐるが月を萬物の消長と密接な關係ありと認むる未開人の思想その他から考へると月讀命の方が本源的な形らしい。又日本の歴史神話には多くのマシツクの要素が含まれてゐる天岩戸の神話、伊邪那岐命黃泉訪問の神話等はその例である。八岐大蛇退治の神話は水界の支配者たる蛇或は龍に未婚の女を捧げる實際的風習の反映であり、大國主命の神話は、末子相續制や掠奪結婚の痕跡を示し、神婚神話の中、神が動物の形をとるのは、トイテミズムの影響。矢の形をとるのは掠奪婚の名残りであらう。次に日本神話全體の特色は如何と云ふに皇室中心なること、神人同格的傾向の濃厚なること、樂觀的なること、滑稽的なることである。

猿田彦神の語原を發見するまで

(五、三三九)

伊波 普猷

サダル(先になる)といふ琉球語の存在により猿田彦神の名に「先導の神」「魁の神」の意義あることを述ぶ。

大内義隆の神道觀 (六、四二七)

宮地 直一

義隆は當代の第一人者たる神道の達人吉田兼右を周防に招き種々なる神道行事を授かり、又之に質問する所あつた。その問答の文書によれば、彼が顯幽兩界に可なりの深い智識を具備し、煩瑣なる事相の詮索にまで没頭してゐたことが知られる。

中央史壇 (第四卷、五卷)

奥州に残つた蝦夷の殘藁 (四、二、二七七)

金田 一京助

鎌倉期以降全く中央の史籍にその消息が絶えた蝦夷の話を様々な文献から拾ひ集め、往古の蝦夷が北海道アイヌと同一のものなることを立證してゐる。

紋章の形成 (四、二、二九六)

沼田 頼輔

紋章の分類 (四、三、三七九)

同

紋章の地方的分布 (五、三、三六四)

同

紋章學者たる氏の蘊蓄を示す有益な論文である。

幕府と佐藤信淵 (四、五、一二三九) 幸田 成友

佐藤信淵は講談所普請の件に坐して江戸拂を命ぜられてゐた。天保改革の際幕府は信淵の上書を嘉して之を徵さんとしたが、鳥居甲斐守が反對して沙汰止となつた。著者は市中取締類中の書類中の資料によつてその事情を詳述してゐる。

備慈多道留 (四、五、一二三七) 伊木 壽一

相良家所藏文書中 備慈多道留よりの書面がある。備慈多道留

とはホルトガル語の Visiador 即ちゼスイット教の一職名で特命監察官とも譯すべきものである。日本に渡來せる宣教師中 Visita tor たりしは Alexandro Valignani 一人であるから、此書狀は彼によつて天正八年有馬天草あたりから相良義陽にあてゝ出されたものであらう。

「衣川の役」の義經 (五、一、九二) 金田一京助

我國の義經蝦夷落傳説は蝦夷地に於ける義經傳説の輸入により寛文頃から起つた、蝦夷地に於ける義經傳説は古くに渡つた御曹司島渡傳説の痕跡と、地名俗解の要素とアイヌ神話の英雄を義經と同一視した要素との三要素から成立つてゐる。何れにしても民衆の思慕愛惜から生れた英雄不死傳説の一例である。

阿只拔都 (五、一、二〇七) 後藤 肅堂

高麗末期に於ける倭寇の大將少年阿只拔都の奮闘並びにその戦死を朝鮮文籍を通じて叙述してゐる。

親鸞聖人と教行信證 (五、六、八三一)

本多辰次郎

喜田博士の教行信證偽作説を駁し、我國撰述の佛書中の寇覓とも云ふべき本書が、博士の云ふ如く備はれ學者の手によつて成りしとは到底信ぜられず、博士の擧げた疑問は基礎極めて薄弱なることを逐一に論じてゐる。

東亞經濟研究 (第六卷)

禹貢製作の時代 (六、一、一) 内藤虎次郎